

## 心気症的傾向には移精変気法を併用

**Q** 漢方治療ではカウンセリングのような精神療法をすることはないのでしょいか。

**A** 漢方薬の処方のほか、心気症的傾向の患者さんには一種の精神療法を重視している。

例えば、紀元一世紀ころにまとめられたとされる『黄帝内経（こうていだいけい）』『素問（そもん）』・「移精変気（いせいへんき）」編では、心気症を体内を循環する「気」の滞りととらえ、執着する「精」（エネルギー）を別の系に移すことによつて気の病を「変気」（気分転換）させることが書かれている。

江戸時代の有名な漢方家、和田東郭（一七四三—一八〇三）はこれを援用して「説諭」と称

する移精変気法を行っている。

不眠、イライラ、こだわり、怒り、おごりなどの治療にあたり、「以前、紅毛より入手した貴重な石を秘蔵しています。特別にこれをお貸ししましょう」と言っておもむろに桐（きり）の箱に入つた石を患者に渡す。「これを終始手に持つてなでさすつて熱すれば、手のひらから陽気生じて次第に全身にめぐり病気がよくなります」と言う。患者はその通り実行し病気は回復する。

和田東郭は「これは石に特別な薬効があるのではなく、石をなでることによつて、雑念を除き安心感を与えるのが目的で、頃合いをみて病気のおおもとになる患者の気の持ち方などを説諭すると病気がよくなる」と述べている。